東日本大震災被災者の近隣交流の変化と自宅再建における交流の位置づけ

―岩手県大槌町で分散居住した被災高齢女性に着目して―

Changes in Neighborhood Interaction during Home Reconstruction for Victims of the Great East Japan Earthquake – Focusing on Elderly Women Living Separately in the Town of Otsuchi, Iwate Prefecture –

阿　部　一咲子*　　平　田　京　子**
Isako ABE　　Kyoko HIRATA

要　約　分散居住した高齢女性の自宅再建過程における近隣交流復興のための支援方法を明らかにするため，岩手県大槌町を対象に近隣交流の変化と自宅再建における位置づけをインタビュー調査した。分散居住で対象者の多くの交流が減少し，中でも家の行き来の減少が顕著だった。この解消には時間の経過と共に近隣との一体感の醸成や，共通体験をもつことである。また高齢女性は自宅再建時に交流へのニーズはあるが，住宅の立地を優先するなど，再建過程にうまく交流が位置づけられていなかった。こうした高齢女性が近隣交流を維持し再建する方法の１つに，仮設談話室のように拠点と運営者がいる機能を地域に維持し，住宅外部に設けることが考えられる。それにより交流を築くまでの時間を短縮し，さらに分散居住の影響で住宅を移る度に交流関係が一からやり直しになるリスクや，交流先を複数に増やし１つの関係性にかかる比重を軽減できると考えられる。

キーワード：東日本大震災，近所付き合い，分散居住，再建住宅，インタビュー調査

Abstract　Victims of the Great East Japan Earthquake are still rebuilding their lives. Neighborhood interaction needs to be considered part of the process of rebuilding one's life. The current study interviewed elderly residents of the Town of Otsuchi who had difficulty reconnecting with neighbors and rebuilding their houses. This study explored ways to rebuild homes while maintaining neighborhood interactions for elderly women living separately. This study also examined methods of support to restore neighborhood interaction. Trips to and from home decreased as a result of living separately. A sense of togetherness must be fostered with neighbors and people need to have common experiences. Elderly women were not positioned well to interact during reconstruction. These findings indicate that the functioning of a community is maintained when there is a site offering a form of support and someone is overseeing that site.

Key words：Great East Japan Earthquake, Neighborhood interaction, Residing separately, Reconstructed homes, Interviews

*　家政学研究科住居学専攻
Graduate School of Home Economics, Division of Housing and Architecture
**　住居学科
Department of Housing and Architecture

1. はじめに

2011 年 3 月 11 日の東日本大震災発生から７年が経過したが，被災者の多くが震災による環境変化に

より，かつての地域コミュニティを失い，震災前の地域コミュニティを再構築できずにいる。

阪神・淡路大震災時に被災者の生活再建を定義するため，先行研究[1~3]で神戸市震災復興総括・検証研究会の生活再建部会が生活再建には「住まい」,「つながり」,「まち」,「そなえ」,「こころとからだ」,「景気・生業・くらしむき」,「行政との関わり」,「人生観・価値観の変化」,「震災体験・教訓の発信」の９要素が重要とした。またこれを用い，生活再建度合いの計測も行われている。

生活再建に重要とされる９要素の中でも「つながり」を構成する１つである「人々の交流」は，震災で住まいを失った被災者が短期間のうちに避難所，仮設住宅，復興住宅と何度も引っ越しをすることから，人間関係がそのたびに解消され，一から新しい人間関係を構築しなければならない状況がある[4]。そこで自宅再建時に人々の近隣交流を考慮することが，被災者の生活再建には重要である。

しかし東日本大震災では住民の分散居住により，震災前の近隣交流の分断がみられた。そこで多くの住民が分散居住した岩手県大槌町を対象とした。また被災者の中でも高齢者は経済的状況から自力での自宅再建が難しい。加えて健康面などから交流の取り戻しが困難であるため，調査対象とする。

前稿[5]では大槌町在住の高齢被災者に関して，住まいの再建段階における近隣交流の変化とその要因，自宅再建時における近隣交流への意識に関するインタビュー調査を行った。結果，対象者の多くが震災後に近隣交流の減少を感じ，その要因として仮設入居時や自宅再建時の分散が挙げられた。また近隣交流を重視し再建を考えても住宅の立地が優先されるなど，実現を阻む要因が様々に存在していた。

そこで本報では高齢者の中でも特に男性より地域の自治組織の参加率が低く，日常生活で近隣交流を育む必要がある高齢女性に着目する。前報の調査結果を用いて，分散居住の近隣交流への影響を高齢女性の近隣交流の特徴，自宅再建過程における近隣交流の位置づけをみる。それらから再建過程での近隣交流復興のための支援方法を明らかにする。

本研究における高齢者は，60 歳以上とした。

2. 分散居住した被災高齢者の近隣交流の変化

対象者の全体傾向から交流の減少に分散居住の影響が伺えたため[5]，分散した者と分散していない者を比較する。また分散居住を震災前，仮設住宅，再建住宅のように住み替える過程で「吉里吉里地区から小槌地区」など地区を移動した者と捉え，集団移転は含まないこととする。また **Table 1** に示す対象者全体の中から再建段階に着目し，分散居住した 29 名を，①仮設に居住し未再建（10 名），②仮設を経て自宅再建（19 名）に分類する。

Table 1　Subject attributes and changes in residence

	性別	年代	同居家族	居住地域			再建した住居形態
				震災前	仮設	現在	
A	女性	90	なし	町方	小槌	沢山・大ヶ口	災害公営住宅（予定）
B	女性	90	娘	町方	小槌	小槌	未再建
C	女性	80	息子夫婦	安渡	不明	桜木町	新築戸建て
D	女性	70	なし	町方	小槌	不明	新築戸建て
E	女性	80	なし	小槌	小槌	小槌	未再建
F	女性	70	なし	町方	小槌	小槌	未再建
G	女性	70	夫	町方	大槌	大槌	未再建
H	女性	80	息子	町方	小槌	不明	新築戸建て
I	女性	80	なし	町方	大槌	大槌	未再建
J	女性	70	娘・孫	安渡	小槌	小槌	未再建
K	女性	80	なし	町方	釜石	桜木町	新築戸建て
L	女性	80	弟	町方	小槌	浪板	新築戸建て
M	女性	80	なし	町方	小槌	小槌	未再建
N	女性	70	なし	町方	小槌	小槌	未再建
A1	女性	90	息子夫婦	吉里吉里	吉里吉里	吉里吉里	新築戸建て
B1	女性	90	なし	浪板	吉里吉里	吉里吉里	未再建
C1	女性	60	夫	安渡	吉里吉里	吉里吉里	新築戸建て
D1	女性	80	なし	沢山・大ヶ口	吉里吉里	吉里吉里	未再建
E1	女性	70	夫	吉里吉里	吉里吉里	桜木町	新築戸建て
F1	女性	80	息子夫婦 孫３人	吉里吉里	吉里吉里	吉里吉里	修繕
G1	女性	90	息子２人	吉里吉里	吉里吉里	吉里吉里	修繕
H1	女性	60	夫	吉里吉里	吉里吉里	吉里吉里	未再建
I1	女性	70	夫	浪板	吉里吉里 浪板	浪板	新築戸建て
J1	女性	80	息子夫婦	吉里吉里	－	吉里吉里	新築戸建て
K1	女性	70	夫・娘	浪板	吉里吉里	浪板	新築戸建て
L1	女性	80	息子夫婦	吉里吉里	－	吉里吉里	新築戸建て
M1	女性	80	弟	須賀町	小槌	吉里吉里	新築戸建て
N1	女性	80	娘	吉里吉里	－	吉里吉里	修繕
O1	女性	90	息子夫婦 孫1人	吉里吉里	吉里吉里	吉里吉里	新築戸建て
P1	女性	60	夫 娘１人	吉里吉里	吉里吉里	吉里吉里	新築戸建て
Q1	女性	80	夫 孫１人	吉里吉里	吉里吉里	吉里吉里	未再建
R1	女性	80	夫	吉里吉里	－	吉里吉里	修繕
S1	女性	70	なし	小枕・伸松	小槌	桜木町	新築戸建て
A2	男性	60	妻・娘	安渡	大槌	桜木町	新築戸建て
B2	男性	60	妻・息子 ・娘	町方	小槌	桜木町	中古戸建て
C2	男性	70	妻	桜木町	小槌	桜木町	新築戸建て
D2	男性	80	妻・娘	吉里吉里	－	吉里吉里	中古戸建て
E2	男性	80	妻・息子	吉里吉里	吉里吉里	吉里吉里	未再建
F2	男性	90	妻・息子	吉里吉里	－	吉里吉里	未再建
G2	女性	60	夫・ 息子・娘	町方	桜木町 （みなし仮設）	桜木町	中古戸建て
H2	女性	60	夫	桜木町	小槌	桜木町	新築戸建て
I2	女性	60	夫・娘	安渡	大槌	桜木町	新築戸建て
J2	女性	70	息子	赤浜	赤浜	赤浜	未再建
K2	女性	70	なし	赤浜	赤浜	赤浜	未再建
L2	女性	70	夫・娘	安渡	小槌	桜木町	新築戸建て
M2	女性	80	なし	須賀町	釜石	桜木町	新築戸建て
N2	女性	80	夫・娘	赤浜	赤浜	赤浜	未再建

【凡例】　－ … 該当しない

2-1　分散居住した対象者の交流変化

まず未再建者の対象者 10 名をみると，立ち話・家の行き来が減少した者が過半数を占めた。

次に自宅再建した者をみると，仮設時には交流変化が明らかである 16 名中，立ち話は９名，家の行き来は 11 名が減少した（**Fig. 1**）。再建時には 17 名中，８名の立ち話・家の行き来が減少した。以上より分散した者で仮設・再建時に，交流が減少した者が多くみられた。

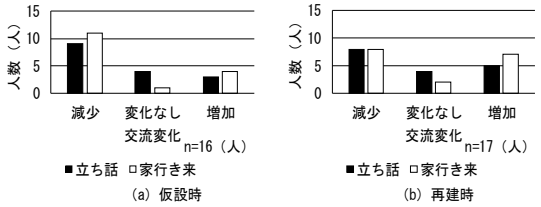

Fig.1 Changes in the number of people interacting: subjects who resided separately

2-2 分散居住していない対象者の交流変化

比較対象として，分散居住していない対象者に着目する。未再建である対象者７名中，立ち話で減少した者が半数程度で,家の行き来は全員が減少した。

自宅再建した 10 名中，仮設時には仮設に居住した５名中，立ち話は２名，家の行き来は３名が減少した。再建時には 10 名中，立ち話は５名，家の行き来は８名が減少した（**Fig. 2**）。

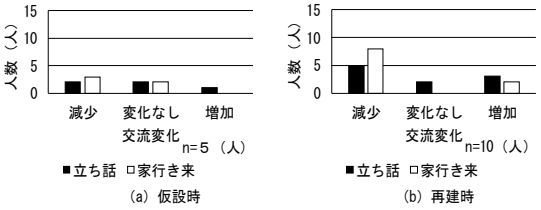

Fig.2 Changes in the number of people interacting: subjects who did not reside separately

分散居住した者と分散居住していない者を比較すると，仮設時に分散した者には特に交流が減少した者が多くみられ，中でも家の行き来の減少が顕著だった。再建時には分散していない者も交流が減少しており，近隣住民の分散など周辺環境の変化を受け，交流が減少すると伺えた。

2-3 交流の減少要因

次に交流に負の影響を与えた減少要因をみる。まず仮設に居住し未再建である者に関して，立ち話と家の行き来における減少要因を表した（**Fig. 3**）。

立ち話では減少要因が 13 項目挙げられ，うち双方向性の問題が 11 項目と多く，双方向性の面で阻害された。また「日中に人がいない」（４名）ことが最も多く挙げられ，日中は勤めに出る人も多いことや，震災による分散居住でそもそも居住者が減り，なかなか人に会わないため立ち話が減少していた。

家の行き来では減少要因が 12 項目挙げられ，うち双方向性の問題が 11 項目と多く，双方向性の面で阻害されていた。また「仮設入居・自宅再建時の分散」,「話す場所がない」,「交流方法の変化」,「深い話をしない」（各４名）が最も多く挙げられた。

分散居住で深い交流関係を築いていた近隣と離れ，家を行き来して深い話をするほどの交流が減少していた。またかつてそのように家を行き来していたことから，知り合って間もない出身地域も異なる新たな近隣とは深い話ができないと考え，家も行き来しないことがある。加えて仮設が狭く，家に招こうとしても互いに遠慮していた。このような家に招く困難さから交流方法を変化させ,立ち話をしたり，デイサービス施設や集会所，談話室で集まって話すような交流へと変化している様子が伺えた。

次に仮設を経て自宅再建した対象者の，再建時の減少要因をみる（**Fig. 4**）。立ち話では減少要因が 11 項目挙げられ，中でも双方向性の問題が９項目と多く，影響が伺えた。中でも「仮設入居・自宅再建時の分散」（５名）が最も多く，分散居住で近隣関係が一から作り直しになり立ち話が減少した。

家の行き来では減少要因が 11 項目挙げられ，双方向性の問題が８項目と多く，影響が伺えた。また

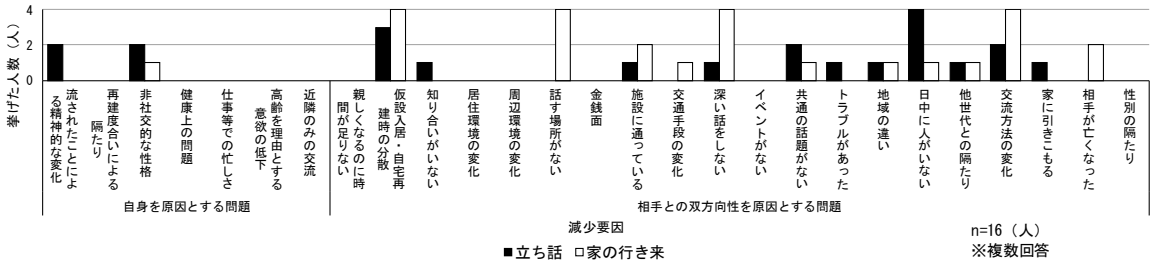

Fig.3 Factors discouraging interaction: subjects who have not rebuilt

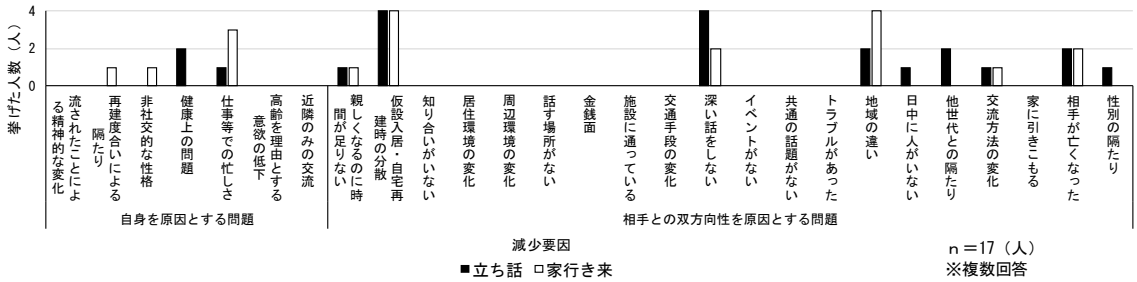

Fig.4　Factors discouraging interaction: Subjects who have rebuilt

中でも立ち話と同じく「仮設入居・自宅再建時の分散」,「地域の違い」（各４名）が多く挙げられた。

このように減少要因でも立ち話･家の行き来共に,「仮設・再建時の分散」が多く挙げられ影響が伺えた。また他の要因の中にも「地域に馴染めない」という意見がみられ，分散居住で自身，相手共に震災前と異なる地域に移動し，交流相手の物理的な変化が起きている。これによる慣習・周辺環境・考えなどの地域の違いや，近隣でのトラブルによる信用の喪失があった。そして相手に対する警戒心や分かり合えないとする先入観が生まれ，交流を拒む態度・行動に繋がっていた。またそもそも新たな近隣が交流相手の想定外である場合もあった。

2-4　分散居住による近隣交流への影響

分散居住により地域に馴染めないという意見を抽出し，計 11 項目にまとめた（**Table 2**）。これには互いに慣れるまでに時間がかかる，と時間が解決する問題がある一方で，相手に対する警戒心などは時間の経過だけでは解決が困難とも考えられた。

Table 2　Inability to adapt to the region

地域に馴染めない理由
・　互いが慣れるまでに時間がかかる
・　相手に対する警戒心
・　分かり合えないと考える先入観
・　信用の喪失
・　交流に対する価値観の変化
・　一から関係を作り直す大変さ・億劫さ
・　深さを変えた付き合い
・　交流を拒む態度・行動
・　交流相手として想定していない
・　慣習・周辺環境・考えなどの地域の違い
・　物理的な相手の変化

分散居住により転居先の地域に馴染めない問題をなるべく早く解決するには，近隣の一体感を生むような共通体験や話題を増やすことが求められる。

3.　再建意思決定プロセスと交流の位置づけ

再建までの意思決定過程とそこでの交流の位置づけから，自宅再建での問題点を明らかにする。

住宅と住環境という要素に関して，震災後の状態，対象者の住要求，住宅と土地の探し方，再建結果，そして現在，住宅と住環境に対し感じている思いを **Fig. 5** のようにまとめた。

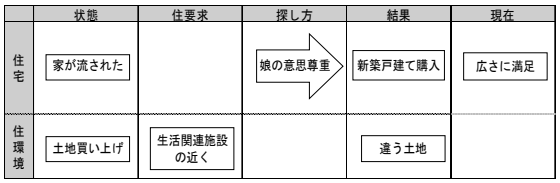

Fig.5　Reconstruction : I2

次に対象者の住要求に関して,「安全な高台に住む」,「再建住宅の近くに商店や郵便局などがある」,「再建住宅の近くに病院などの医療機関がある」,「住み慣れた地域に再建する」,「戸建てか，集合住宅か，望む居住形態で再建する」,「再建住宅の近くに知り合いがいて，交流する」,「住宅に早く入居できる」,「再建するにあたり, 行政の支援が得られる」,「再建場所が職場に近い・行きやすい」という９項目を示し，重視したもの全てを挙げる形をとった。

3-1　対象者属性

再建過程を聞いた A1～N2 の内，未再建の者，震災前の住宅を修繕した者を除く 29 名を対象とする。

再建住宅に関しては，震災前と同じ地域に再建した者が 10 名, 仮設と同じ地域に再建した者は２名, 震災前・仮設とも異なる土地で再建した者は８名で

あった。対象者の半数が震災前と同じ土地に再建した一方，多くの対象者が全く住んだことがない土地で再建していた。また住居形態をみると，新築戸建てが 17 名，中古建て住宅を購入したのは３名，未再建であるのは９名であった。ここから，対象者のほとんどが新築戸建て住宅を再建していた。

3-2　再建意思決定プロセスにおける特徴

再建意思決定プロセスが分かる対象者 27 人を，再建済み，未再建，高齢女性と分類し特徴をみた。

まず再建済みの対象者 20 人，未再建である対象者７名に対し，再建意思決定プロセスをみた。再建済みと未再建である対象者を比較すると，未再建の方が住要求は多くなっている（**Fig. 6**）。

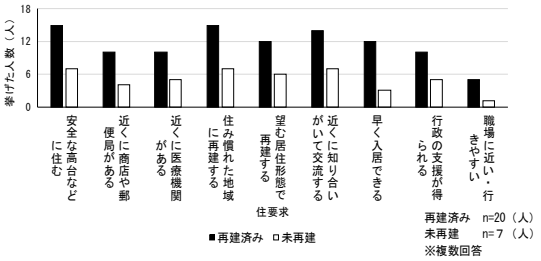

Fig. 6　Demand for housing in each stage of reconstruction

これには未再建者は再建に関して具体的に考えておらず，現実味がないことが考えられる。対して再建済みの者の多くが重視した項目は，現実的な検討を踏まえ整理された要求だと推察される。

具体的には高台や住み慣れた土地に住むという立地，居住形態，入居までの時間，そして震災前の知り合いとの交流を重視していた。また家の間取りや住宅の性能に関する意見はほとんど聞かれず，対象者の多くが家の間取りに対して意識がなかった。交流に関しては再建済み・未再建者双方に共通し，過半数の対象者が重視していた。しかし実際には交流が減少した者が多い[5]ことから自宅再建時の要望が実現していないことが分かる。

次に性別による再建過程の違いをみた。高齢女性は住要求を多数挙げているのに対し，高齢男性は立地，利便性，住宅の居住形態，入居までの時間，そして交流を重視していた（**Fig. 7**）。ここから再建時に主導権を握ることが多いと考えられる男性は，実

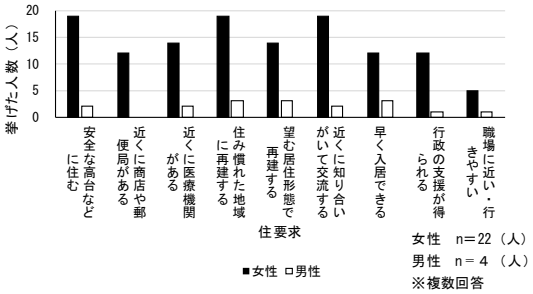

Fig. 7　Demand for housing by gender

現性を重視して住要求を考えた可能性がある。

3-3　再建における主導権の有無による違い

以上の結果を踏まえ詳細に自宅再建過程をみると，再建の主導権を握った者と他者に任せた者がいた。後者には同居人のいる女性が多く，夫や息子などが主導権を握っていた。一方男性の対象者ではほとんどが主導権を握っており，再建時には男性が主導に立つことが多い。また主導権を握らなかった高齢女性には，自身の考えはあるが主導権を譲った場合と，主導権を握る相手がいるためそもそも自身で考えない場合があった。一方で主導権を握った者にも高齢女性はみられ，独居と同居人のいる場合があった。同居人の夫や息子などがいても再建に関して意見を出し反映させていた場合があった。

実際に再建後の状況をみると不満な人も満足している人も，主導権の有無に関係なくみられた。再建したことで住宅の広さの問題は多くの対象者の中で解消されたが，住宅の機能や立地，交流への後悔が伺え，主導権をもち重視していてもこれらの実現が困難であることが伺えた。

3-4　交流の意識度合いによる再建の違い

住要求のうち，交流に対する意識の有無による再建の違いをみた。再建済みの者のうち，交流を意識した 11 名と意識しなかった６名を比較した。

再建過程における交流の位置づけをみると交流を意識し再建した 10 名中，**Fig. 8** のように住要求のほとんどを９名が重視した。一方で交流を意識しなかった者は，**Fig. 5** のように重視した住要求が少なく，１名だった。ここから交流という見落とされがちな要素に気づくことができる者は，再建時に多くの要素を考慮していた。また交流を意識した再建者は，

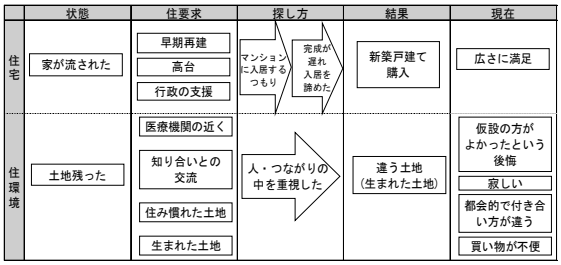

Fig. 8　Reconstruction: M2

同時に立地についても全員が重視していた。

しかし調査結果から交流は実現できず，また交流を意識した者でも再建時に第一優先にはせず，住宅の立地を優先していた。交流を意識し再建した者は高齢女性がほとんどを占めており，高齢女性には交流へのニーズがあるが住まいづくりがそれを狭めていると伺える。また実際の交流相手は非同居の家族，親族，兄弟や震災前の知り合い，近隣に向かっている。これに加えて再建した現在の近隣交流も減少していることから，必要最低限の交流すらも確保しにくくなっている現状が伺える。このように再建時に交流を意識していても，再建過程にうまく位置付けられていないことが明らかになった。

4. 被災高齢女性の近隣交流における特徴

高齢女性の近隣交流における特徴を明らかにするため，高齢女性 41 名と高齢男性６名に関して，人数・相手の変化，影響した減少・促進要因をみる。

4-1　近隣交流の変化

高齢男女の近隣交流における交流人数の変化を，仮設居住者 36 名，再建した 25 名からみる（**Fig. 9**）。まず高齢女性は立ち話・家の行き来共に仮設・再建時に共通して減少した者が過半数を占めた。

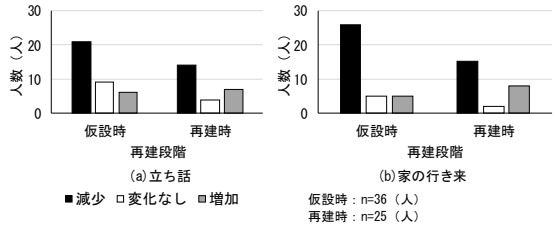

Fig. 9　Changes in the number of people interacting: elderly women

高齢女性と比較するために仮設に居住した者４名，再建した５名から高齢男性の交流人数の変化をみる。立ち話では仮設時には変化のなかった者，再建時には増加した者が全体の半数を占めた。家の行き来では仮設時には減少した者が全体の半数，再建時には過半数を占めた。高齢男女に共通して仮設・再建時共に家の行き来が減少した人が最もみられ，取り戻しが困難だと分かった。

この家の行き来に着目し，交流相手をみる。高齢女性が仮設・再建時に家を行き来する相手を示した（**Fig. 10**）。仮設時には交流が消滅した者が 18 名と最も多いが，再建すると６名に減少した。一方で震災前の相手と家を行き来した者が 13 名と過半数を占めた。これには仮設住宅の狭さが再建で解消され，家に招けるようになった影響が考えられた。

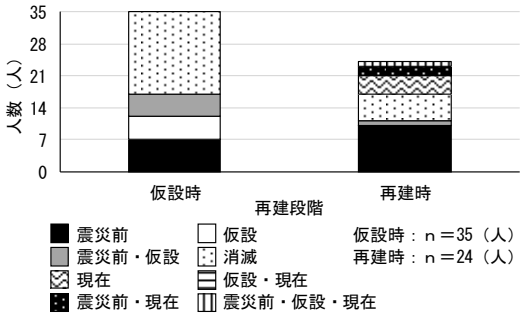

Fig. 10　Changes in type of interaction: elderly women

次に高齢男性が仮設・再建時に家を行き来する相手を示す（**Fig. 11**）。仮設時の相手に震災前の知り合いを挙げたのは３名で，全体の過半数を占めた。また再建時にも震災前の知り合いを３名が挙げ，半数を越えた。高齢男女は仮設・再建時共に震災前の知り合いと家を行き来しており，近隣との新しい関係構築ではないことに注意する必要がある。

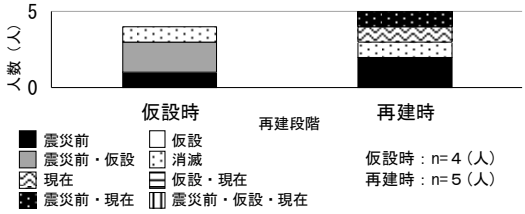

Fig. 11　Changes in type of interaction: elderly men

4-2　家の行き来の減少要因

高齢男女の家の行き来の減少要因に着目し，どの要素が影響し困難が生じたか明らかにする。高齢男性は各要素とも１名しか挙げておらず，傾向が分かりにくいため高齢女性の結果をみる。

仮設時の減少要因から「話す場所がない」と仮設の機能面の問題が最もみられ，部屋の狭さから荷物が溢れ綺麗に片付けられないとしていた（**Fig. 12**）。そのため非同居の家族や兄妹，親戚など血縁者は招けるが，近隣を招くことには難しさを感じていた。

再建時には「仮設入居・自宅再建時の分散」と「交流方法の変化」が最も挙げられた（**Fig. 13**）。分散居住により震災前の知り合いの現住所が分からず，関係のつなぎ直しが困難だった。また招いた際の話題として，震災前は何十年も付き合いがあるため地域や昔の話など共通の話題があった。しかし現在はそうした話ができず，交流の深さの欠如が伺える。また交流方法が変化し今までは立ち話や家を行き来していたが，新たにデイサービス施設などの拠点を介した交流が出現していた。加えて住宅を再建してもらうなど世話になっている同居家族に遠慮し，親戚など血縁者のみを家に招いていた。この結果から近隣交流に親戚を加えて捉えていると分かった。

4-3　家の行き来の促進要因

高齢男女の家の行き来の促進要因から具体的な交流相手を明らかにする（**Fig. 14**，**15**）。

仮設・再建時共に「社交的な性格」，「震災前の知り合いがいる」，「家族・兄弟・親戚との交流」が多く挙げられた。前述のように家の行き来の主な相手は震災前の知り合いであり，加えて親族を近隣交流に含め答えている結果となった。つまり実際の近隣住民との交流は，対象者が交流状況に関して答えた回答よりも実際には減少したことが考えられる。

仮設・再建時共に最も多くみられた「社交的な性格」に関しては，女性の方が多く該当していた。震災前の知り合いなどすでに交流関係がある人達だけでなく，新たな近隣に対しても交流を築こうと積極的に行動をとる動きがみられた。また相手が身体的な問題を抱え会いに来ることが困難な場合，自分から会いに行くという交流への積極性がみられた。

また高齢男性の対象人数が少ないものの，促進要因に「仕事・役職・趣味の人脈」を挙げていた。具体的な意見をみると，仮設で代表を務め人脈を広げたり，会社の同僚と集まったりと目的性のある交流をしていた。

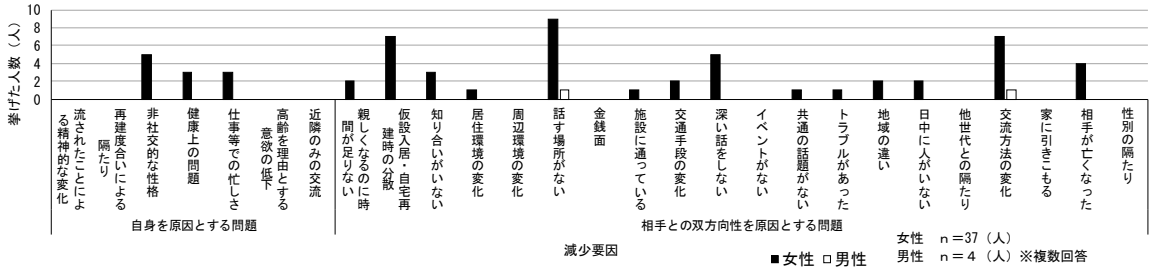

Fig. 12　Factors discouraging coming and going home by gender: residing in a shelter

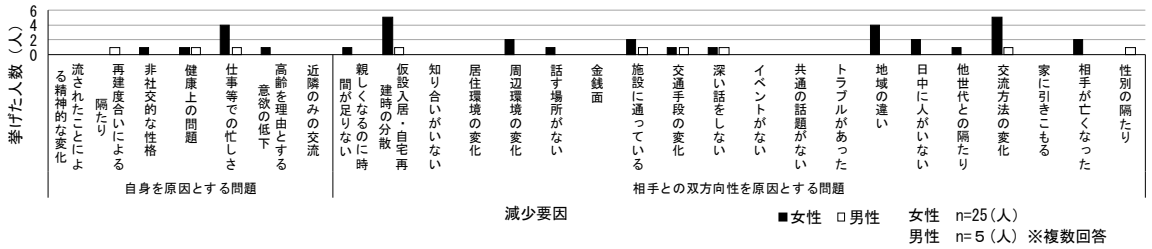

Fig. 13　Factors discouraging coming and going home by gender: residing in a shelter

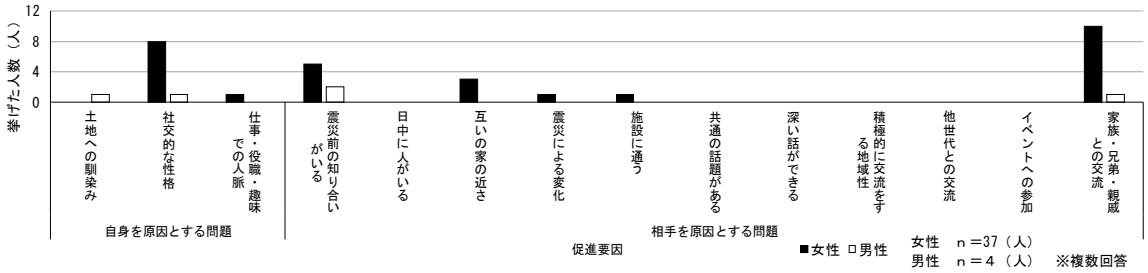

Fig. 14　Factors promoting coming and going home by gender while residing in a shelter

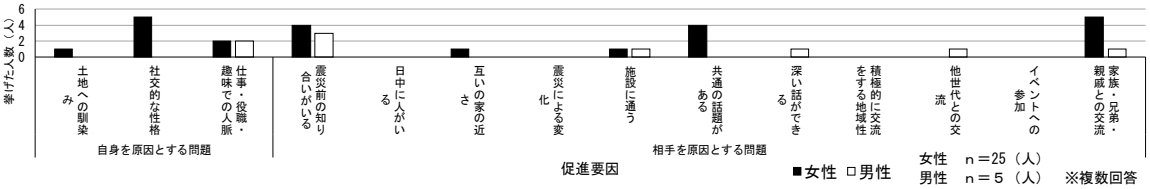

Fig. 15　Factors promoting coming and going home by gender while residing in a reconstructed home

4-4　高齢女性にとっての近隣交流

高齢女性には男性のように地域団体の活動など，具体的な目的をもたない近隣交流がみられた。また共通点が少ない相手にも，社交的に交流を求めていた。そんな高齢女性でも家の行き来は減少し，具体的な交流相手は非同居の家族・兄弟・親族だった。

しかし家族や親族などの血縁者は震災で失っている場合もあることに加え，新たに相手を増やすことは困難である。一方で再建先の近隣は増加が可能な相手であり，両者は互いに補完しあうことができる。ここから高齢女性の交流を震災前と同程度に回復するためには，近隣交流の増加が必須である。

5.　被災高齢女性の交流における支援の方向性

既存の被災高齢者への交流支援を調査し，これまでの高齢女性に関する交流現状と問題点より，今後の交流支援の方向性を考察する。

5-1　高齢女性の交流における問題点

これまで明らかにした高齢女性の交流における問題点をみると，１点目として交流相手が挙げられる。高齢女性が交流を求めた相手は親族・非同居の家族・兄弟，友人，デイサービス施設の人が多く，主に血縁者や震災前からの友人であった。一方で現在の近隣を挙げた者は少なく，近隣交流を求める者は少なかった。

２点目は分散居住により地域に馴染めない問題である。これには時間が解決するものと，時間だけでは解決しない問題があった。また時間をかけても解決しない馴染みのなさの解消には，近隣との一体感の醸成や共通体験をもつことなどが必要である。

３点目は再建過程に交流をうまく位置付けられないということである。再建意思決定プロセスより，交流を意識し再建した者でも交流は最優先されず，立地などが優先されていた。その結果，再建後に交流が得られず後悔している者もおり，対象とした高齢女性には交流へのニーズがあるが，住まいづくりがそれを狭めていた。加えて再建した現在の近隣交流が減少しており，必要最低限の交流すら確保しにくくなっている現状が伺える。このように再建時に交流を意識していても，再建過程にうまく位置付けられていない。この３点を踏まえた上で，支援の方向性を探る。

5-2　高齢者の交流に関する支援の今後の方向性

日常時・非常時に高齢女性を支えるには，なるべく短期間で震災前と同程度の家を行き来するような交流を保つ必要性がある。また十分な交流量を保つには，１人が利用する交流拠点を増やし相手の幅を広げ，１つの関係性への比重を軽くし交流を失うリスクの分散を図ることが必要である。そこで今までの住戸内などでの交流に加え，住宅外部での交流を

得る機会が重要と考えた。

震災後に活用された高齢者等サポート拠点，仮設住宅集会所，店舗に着目する。高齢者等サポート拠点とは厚生労働省が仮設での要介護高齢者等の安心した日常生活を支えるため，応急仮設住宅地域に高齢者等に対し総合相談，デイサービスや生活支援サービスを提供する目的で配置した。３拠点に関し文献[6~8]とインタビューより特徴を抽出し，地域性，交流時間，などの８点に分類した（Table 3）。

Table 3　Characteristics of sites where interaction occurred

	仮設住宅談話室・集会所	高齢者等サポート拠点	店舗
地域性	狭域	広域	広域
交流時間	時間制	時間制	時間制
拠点までの交通	自身で通う（徒歩・バス）	自身で通う（徒歩・バス）	自身で通う（徒歩・バス）
		車での送迎	車での送迎
機能	健康管理	健康管理	会話
	住民の困りごとや健康の相談窓口	デイサービス	買い物
	個人のスキルアップ	総合相談	
	音楽や炊き出し等の住民企画	利用者の医療、買い物等日常生活における送迎	
	レクリエーション	昼食の提供	
	地域交流の場としての提供	レクリエーション	
		地域交流の場としての提供	
		施設における機械類の充実	
		日常生活における送迎	
交流相手	地域住民（震災前）	地域住民（震災前）	地域住民（震災前）
	地域住民（仮設）	地域住民（仮設）	地域住民（仮設）
	地域住民（現在）	地域住民（現在）	地域住民（現在）
	支援団体	支援団体	店員
	仮設住宅支援員	施設職員	
交流量	流動的	固定的	流動的
話題	当たり障りない話	当たり障りない話	当たり障りない話
	深い話	深い話	深い話
具体的な話題	共通のプログラムに関する話題	共通のプログラムに関する話題	生存確認
	地域の話題	地域の話題	地域の話題
	震災前の地域の話題	震災前の地域の話題	震災前の地域の話題
			情報交換
			再建の話題
			家族の話

【凡例】
…立ち話に該当する項目
…家の行き来に該当する項目
…両方に該当する項目

このような３つの拠点の特徴を生かし，対象者の事情に応じて交流を保つために，今後の支援の方向性を考察する。Table 3 のような特徴をもつ３つの拠点に関して，交流の深さを立ち話・家の行き来の２段階で捉え，さらにどの程度までの交流を取り戻せるかをみる。地域性，交流時間などの各項目に対して，立ち話・家の行き来の片方，または両方を取り戻すことができるか可能性を表中に色で表した。

地域性では談話室は徒歩圏内の近隣住民が集うため狭域で，住宅付近での立ち話に該当する。一方サポート拠点・店舗は送迎や交通手段があり広域で求められ，遠い知人を家に招くことに該当する。交流相手は全拠点で各再建段階での近隣と交流する可能性があり，立ち話・家の行き来を築く可能性がある。交流量は談話室・店舗ではその日に何人と会えるか分からず，出会った人とする立ち話に該当する。一方サポート拠点は曜日を決め通うため固定的で，日付を決め家に招くことに該当する。話題は全拠点で立ち話での当たり障りない話と，家の行き来での深い話ができる。各拠点の構成要素からどちらかと言えば談話室は立ち話，サポート拠点・店舗は家の行き来程の交流の取り戻しに効果的と考える。

このように地域性や交流量などにおいて，各拠点で効果的に取り戻せる交流の程度は異なる。これらを自身の都合に合わせ効果的に利用することが，高齢女性が十分な交流状況を保つために必要である。

しかし仮設談話室や仮設住宅支援員も復興が進むにつれ，サービスが終了していく現状がある。共通点の少ない新たな近隣とあまり長い時間をかけずに交流を深めるには，談話室やサポート拠点などの場所と，拠点を運営し様々なプログラムを行う人材が重要である（Fig. 16）。少なくとも震災前と同様の交流状況を取り戻すためには，仮設住宅が閉鎖しても，談話室の機能・人を近隣のどこかに維持することが必要である。それにより転居と共に交流関係が切れることや，交流の減少を防ぐことができると思われる。

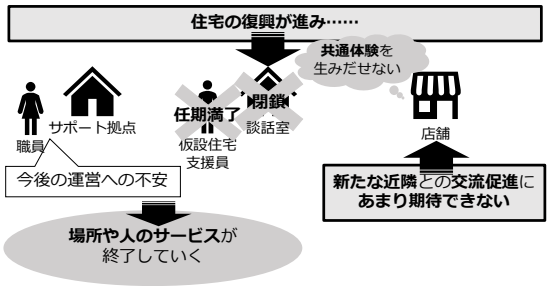

Fig. 16　Current state of sites of interaction

6. おわりに

本研究では分散居住した高齢女性の自宅再建過程における近隣交流復興のための支援方法を明らか

にすることを目的に，岩手県大槌町を対象に近隣交流の変化と自宅再建における交流の位置づけをインタビュー調査した。

分散居住による交流の減少には近隣住民の入れ替わりにより分散していない者にまで影響していた。この分散居住で地域に馴染めない問題の解消には，時間の経過と共に近隣との一体感の醸成や，共通体験をもつことなどが必要と考えられる。

また高齢女性は自宅再建時に交流に対するニーズはあるが最優先されず，住宅の立地を優先するなど，再建過程にうまく交流が位置づけられていなかった。こうした高齢女性が近隣交流を維持し再建する方法の 1 つに，仮設談話室のように拠点と運営者がいる機能を地域に維持し，住宅の外部に交流を得る機会を設けることが考えられた。それにより交流を築くまでにかかる時間を短縮し，さらに分散居住の影響で住宅を移る度に交流関係が一からやり直しになるリスクや，交流先を複数に増やし 1 つの関係性にかかる比重を軽減できると考えられる。

謝辞

2015 年度調査は 2015 年度平田研究室卒論生，櫻井祐希氏と共同で行った。記して謝意を表する。並びに本研究の調査にご協力頂いた大槌町の方々，デイサービス施設の皆様に深く御礼申し上げる。

引用文献

1）田村圭子，立木茂雄，林春男：阪神・淡路大震災被災者の生活再建課題とその基本構造の外的妥当性に関する研究，地域安全学会論文集，2 号，pp.25～32，2000 年.

2）田村圭子，林春男，立木茂雄，木村玲欧：阪神・淡路大震災からの生活再建 7 要素モデルの検証―2001 年京大防災研復興調査報告―，地域安全学会論文集，3 号，pp.33～40，2001 年 11 月.

3）木村玲欧，林春男，田村圭子，立木茂雄，野田隆，矢守克也，黒宮嘶希子，浦田康幸：社会調査による生活再建過程モニタリング指標の開発―阪神・淡路大震災から 10 年間の復興のようす―，地域安全学会論文集，8 号，pp.415～424，2006 年 11 月.

4）林春男：いのちを守る地震防災学，岩波書店，初版，2003 年 6 月 27 日.

5）阿部一咲子，平田京子：東日本大震災被災者の自宅再建時における近隣交流の変化と阻害要因―岩手県大槌町で分散居住した被災高齢者に着目して―，日本女子大学大学院紀要 家政学研究科･人間生活学研究科，第 24 号，pp.123～132，2018 年 3 月.

6）元持幸子，穂坂光彦：岩手県大槌町における地域支え合い拠点の再生―東日本大震災後の社会的居場所の分析―，日本福祉大学社会福祉論集，pp.59～77，第 134 号，2016 年 3 月.

7）厚生労働省：応急仮設住宅地域における高齢者等のサポート拠点の設置について，http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000001amh8-att/2r9852000001dgwk.pdf，2011 年 4 月 27 日.

8）大槌町：大槌町仮設団地 official site，http://otsuchi-town.jp/，2017 年 12 月 6 日（閲覧）.

指導教員：住居学科　平田京子教授